

青少年と「性的なこと」の距離

活水女子大学 石川由香里

性的な関係を持つことは、親密性の1つの表現といえる。特に青少年においてはその欲求が高いとみなされ、性交経験に至るまでが発達モデルの形で捉えられてきた。ところが近年、性的経験率並びに性的関心の低下が指摘されている。それは青少年期における親密性の表現に何らかの変化が生じていることの表れであるのだろうか。ここではその問題を、40年以上にわたり継続されてきた「青少年の性行動調査」の分析を通じ、考えてみたい。

1. 青少年の性行動調査について

総理府青少年対策本部の委託を受け、(財)日本性教育協会によって第1回「青少年の性行動調査」が実施されたのは、1974年のことである。調査開始の1つの契機は、当時、若者の”性の低年齢化””性の乱脈化”が社会問題になったことにあったという(原2001)。調査の目的は(1)生理・心理・行動面から、性的経験の年齢に伴う進行状況を明らかにするとともに、時代的推移を探ること、(2)性的経験の個人差要因のうち、家庭環境、学校・友人、マスメディアの影響や性教育の効果など社会的要因や教育的要因などとの関連を明らかにすること、(3)現代青少年の生の心理的側面の特徴を明らかにするとともに、それらのものと社会的要因や性教育経験との関連を明らかにすることとされている(間宮1988)。

以後6年ごとに全国規模による調査が実施され、高校生、大学生に加えて第3回からは中学生も対象となった。継続的で、地域的・年齢的に偏りのない青少年の性行動の現状を明らかにすることができる点では、国内で唯一の調査といえる。現在の主な質問項目は(1)性経験・性行動、(2)性規範・性意識、(3)性的被害、(4)性教育と性知識・情報、(5)友人関係、(6)家族関係、(7)メディア利用状況となっている(片瀬2011)。

2. 社会の受け止め方の変化

調査結果はその都度、社会的関心を集めてきたが、その論調は時代とともに変化している。調査の開始された当初の調査票の特徴として、現在は存在しない身長や体重を聞く設問があった点からは性が生物学的発達モデルとして捉えられていたこと、また性病についての細かな質問がされていたことから公衆衛生的な関心事でもあったことが推察される。同時に相手ならびに性的行動の行われた場所などについて詳しく尋ねている点には、「逸脱行為」に対する管理意識もうかがわれる。逆に同性間の性的経験についての設問が多い点には、それが青年期においては逸脱的なものとは捉えられていなかった可能性を示唆している。

キスや性交の経験率は回を追うごとに徐々に上昇傾向にあったが、特に第3回から4回にかけての変化は大きく、性の「日常化」というキーワードが示された(原2001)。また第6回には、それまで高校生、大学生とも男女間で10ポイント以上あった差が見られなくなり、そのことは女子の性行動の活発化という形で新聞紙上等において大々的に報道された。2000年代初頭はジェンダー・フリー・バッシングが起きた時期にあたり、青少年の性行動の活発化は望ましくない現象として捉えられていたといえるだろう。ところが2011年の第7回調査で経験率の低下が明らかになると、今度は若者、特に男子の「草食化」として少子化にまで結びつけ、それを憂慮する報道がなされる現象が見られるようになった。

3. 親密性の変容をめぐって

調査開始の当初から問題関心の1つは、若者の性行動や性意識に影響を与える社会的背景に置か

れていた。例えば性別役割分業意識の否定という形でジェンダー平等意識の広がりが見られるにもかかわらず、性的場面において男性イニシアティブがとられ続けている点は繰り返し指摘されてきた。ジェンダーとセクシュアリティの関係性の解明はこの調査における1つの大きなテーマといえる。法制度の整備など社会的関心の高まりに先んずる形で、第4回から性被害についての設問を導入されたことは、性におけるジェンダーの非対称性への関心があったことが大きいにもつながっている。

青少年の性行動は生理的欲求だけではなく、社会的、心理的影響によって喚起される。特定の誰かと親密な関係になりたいというのは、心理的・社会的欲求に他ならない。親密な他者との間に性的なつながりを求めようとするパターンの1つに、家族あるいは学校からの疎外があり、それはとくに女子において顕著である（石川 2011）。家族イメージは近年良好な傾向を示しており、したがって定位家族内で親密性が確保されていることも、若者の性的関係を持つようとする欲求から遠ざけている遠因となっている可能性も指摘できる。

青少年の間で実際に生じている現象とは、活発な性行動を早期から行う層と性に対し消極的な層との分極化である（林 2011）。高橋征仁は消極化の背景にあるのは、性のリスク意識の高まりであることを指摘する。ただし、性被害経験率に変化がみられないように、それは若者がリスク状況に置かれていることとイコールではない。リスク意識とは、「むしろ、恋愛や性が自由化され、異性との接触機会が増えたことによって、自分自身の選択に対してシビアにならなければならない状況」において生じているという（高橋 2011：59）。

友人についてもまた、異性・同性ともに親しい友人がいると回答する割合は高い。以前と異なる点は、そうした友人たちと性的な会話をする、あるいは友人の性的行動が気になるという割合が減っている点である。高橋は、友人とのコミュニケーションは性的リスク意識を低下させることを示していたが、コミュニケーションの中に性的な事柄が取り上げられること自体が減少していれば、そうした効果は働かないだろう。

さらにここでは、ジェンダーの平等性とセクシュアリティの多様性についての社会的認識が広がったことによって、従来想定されていた「性的発達モデル」が意味をなさなくなったことが、青少年の性行動が不活発であることのもう1つの要因として存在するという仮説を提示したい。したがって現在みられる性的多様性に対する容認傾向は、ヘテロノーマティビティからの脱却に向かう可能性を示す余地を残すといえるだろう。

<参考文献>

日本性教育協会編,1988,『第3回青少年の性行動』

日本性教育協会編, 2001,『「若者の性」 第5回青少年の性行動調査報告書』小学館.

日本性教育協会編, 2011,『「若者の性」 第7回青少年の性行動調査報告書』小学館.